

アウトプット重視の英語指導法

—日本人大学生のGroup Work Reportingの実践—

A Study on Effective Output Activities for Japanese University Students

—Group Work Reporting—

巽 徹

Toru TATSUMI

Keywords : 英語教育, アウトプット, 英語コミュニケーション, グループワーク

1. はじめに

本研究の目的は、学部専門科目「英語コミュニケーション」の授業において、学生の英語によるコミュニケーション能力を高める授業実践を提案することである。「英語コミュニケーション」は、将来、中学高等学校の英語科教員を目指す学生が主に履修する科目であり、英語教師となるにふさわしい英語力の育成を目指している。英語教師に求められる英語力について詳しくは後述するが、これまでの筆者の英語教師としての経験から①教科書教材（題材、言語材料）を理解し生徒にわかりやすい英語でオーラル・イントロダクションができること②生徒のモデルとなる英語の発音ができること③生徒の発話する英語を理解しコミュニケーションを図ること④AETとのチームティーチングを計画、実施できることなどは不可欠であると考えられる。

2007年度後期の本授業の「学生による授業評価」によると、高校などのこれまでの授業では「コミュニケーションの授業という名目でも、先生中心の講義ばかりだった」「発音練習や英語で会話を行うことは、中学以来ほとんど行ってこなかった」「大学に入ってやっとコミュニケーションの授業が受けられた」「コミュニケーションという教科名通り、英語を使う体験もたくさん出来た」などのコメントが寄せられ、学生のこれまでの英語学習歴において、英語を用いて実際にコミュニケーションを行った経験が少なかったことがうかがえる。とりわけ、英語を用いて話したり、書いたりして表現する、アウトプット活動が不足していたようである。そこで、本授業において、将来英語教師となる学生に英語を用いたコミュニケーションを積極的に行わせることは重要であると考えられる。

本実践で取り組んだGroup Work Reportingの詳細は後の章で述べるが、大まかに言うと「聞く」「話す」「読む」「書く」4技能を総合的に用いる言語活動である。特に、「聞いた内容を話して伝える」「聞いた内容を書いてまとめる」「読んだ内容を書いてまとめる」「読んだ内容を話して伝える」活動であり、いずれも「話す」「書く」といったアウトプットを重視している。本研究は、Group Work Reportingを本授業「英語コミュニケーション」の中心的な活動として位置付け、英語教師に求められる①～④の英語力を養う実践を報告、提案するものである。

2. なぜアウトプット重視か？

2.1 英語教師に求められる英語力

文部科学省（2003）では、英語教師が備えるべき力を二種類に分けて示している。一つは、授業を構成し実施する「英語教授力」であり、もう一つは、英語教育実践に必要な英語運用能力「英語教育的英語力」である。ここでは、後者の「英語教育的英語力」について扱うこととする。両者は密接に結びついて英語教師の資質の中心をなすものであるが、前者は主に「英語科教育法」がカバーする内容であり、「英語コミュニケーション」では主に後者の「英語教育的英語力」をターゲットとするからである。

『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』(文部科学省, 2002)では、英語教師に求める英語力として、英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点を当面の望ましい目標値として示している。もちろん英語教師の力量はこのような試験の数値ですべて示されるわけではないが一つの目安とすることはできる。また英語教師の授業実践に必要な「英語教育的英語力」は、次のように示されている。

- ・英語を構成する発音・語彙・文法体系を認識し、実際の英語学習場面において英語運用能力育成の筋道を示して、生徒の英語運用能力を高めるための力
- ・日常会話はもとより、教科書や教科書に準拠したCD・テープなどの教材の内容を完全に理解でき、教科書の題材に関連する内容について表現できる英語運用能力、ALTとのティームティーチングを計画、実施できる力
- ・コミュニケーション活動の簡潔な説明やモデルの提示ができる力
- ・コミュニケーション活動と結び付けて文法などの言語教材を導入できる理解へと結びつける力
- ・コミュニケーション活動に参加したり、生徒に質問したり、生徒の質問に答えたり、話題の転換を図ったり、活動を活発化できる力
- ・英語を楽しく学ばせることのできる力、など (文部科学省, 2003)

つまり、コミュニケーションを重視した「英語教授力」に合わせ、教師自身が英語でコミュニケーションを行うモデルとなることが求められているのである。特に、題材や言語材料を英語で分かりやすくプレゼンテーションしたり、説明したりするなどアウトプットの力が重視されている。

2.2 言語習得におけるアウトプットの役割

2.2.1 アウトプットがインプットの質を高める

「ナチュラル・アプローチ」(Krashen & Terrell, 1983)では、第二言語習得を促進するには、「理解可能なインプット」を大量に与えることが重要であると主張されている。この考えには多くが賛成するところである。ただし、「理解可能なインプット」が、第二言語習得のための必要・十分条件であるという主張に対しては様々な議論がある。筆者は自らの外国語教師としてのこれまでの指導経験から、「理解可能なインプット」が必要であることには疑問の余地はないが、第二言語習得には「理解可能なインプット」だけで十分であるとは考えていない。むしろアウトプットが学習者の言語習得上重要な役割を果たすのではないかと考える。学習者が英語を用いて話したり、書いたりする活動を通して、言語習得が促進されたという指導経験が少なからずあるからである。

Ellis (1994) が第二言語習得の過程を示したモデルでは、アウトプットをすることがインプットに何らかの影響を与えることを示している(図1)。このモデルでは、「気付かれたインプット」(noticed input)のうち「理解されたインプット」(comprehended input)が学習者の内部に「内在化」(intake)されると、学習者の言語運用を可能にする言語知識(implicit knowledge)やインプットを促進したりアウトプットをモニターする言語知識(explicit knowledge)として吸収され、アウトプットにつながることを示している。また、アウトプット(L2 output)からインプット(L2 input)につながる矢印が示す通り、アウトプットが、インプットに何らかの影響を与えることを示すモデルである。

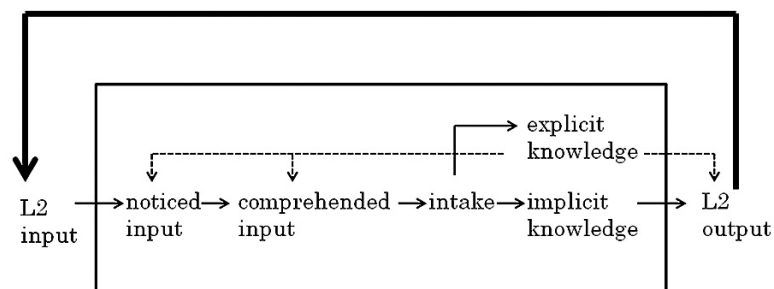


図1 A Framework for investigating L2 acquisition (Ellis 1994:348)

アウトプットがインプットに与える影響として、村野井（2006）が指摘するようにアウトプットをすることによってインプットに学習者のより強い注意が向くことなどがあげられる。たとえば、学習者がアウトプットした際に、英語で表現したいことが言えなかったり、書けなかったりした場合、自分の言語の知識に「穴」があることに気づき、その「穴」を埋めようとする中でインプットに強い注意が向く可能性が高くなるということである。しかも、アウトプットをすることなしには、この「穴」に気づくことができないのである。また、自分のアウトプットした英語表現と正しい表現あるいはよりよい表現の仕方を比べ、そこにギャップがあることに気づき、自ら調べたり他の人に尋ねたりするなど、学習者言語を向上させる可能性が高まるということである。

本研究では、アウトプットを重視した英語指導法の提案をねらいとするが、それは、インプットを軽視するということではない。これまでの学生の英語学習はインプットに偏ったものであったため、そのバランスを保つためにあえてアウトプット重視を主張しているのである。インプット、アウトプットは車の両輪のようなものでありバランスよくあるべきである。しかも、両者が効果的に関連しあうような仕組みを作ることが重要である。

2.2.2 アウトプットが学習者の言語能力を引伸ばす

村野井（2006）は、英語によるアウトプットが、次の点で重要であると述べている。

1. 学習者自身の自分の第二言語能力の「穴」に気づく
2. 目標言語と中間言語のギャップに気づく
3. 理解可能なアウトプットを産出する努力が第二言語能力を「引伸ばす」
4. 仮説検証の機会が生まれる
5. 統語処理・文法意識化が促される
6. 言語知識の自動化が進む

（同：65-71）

Ellisのモデル（図1）のように、英語をアウトプットすることによって、学習者は足りない言語知識の存在に気づきインプットの質を高めることにつながる（1, 2）。さらに、アウトプットを行うことにより言語知識が活性化され使えるようになったり（3）、自分の言語知識の正しさを確かめたりすることができる（4）。聞いたり、読んだりする場合には意味処理が主に行われるのに対し、アウトプットでは、それに加え語順や時制など文法的な言語処理が求められる（5）。アウトプットすることで、いろいろな言語項目を何度も使う機会が増え自動化を促進する（6）。

おぼれそうになって泳ぎ方を覚えるのと同じように、アウトプットして意思を何とか伝えようとあがくことによって、第二言語能力が引き伸ばされることもありうる。（中略）頭のどこかにはあったけれど、あまり使ってこなかった言語知識が、アウトプットしようとする中で活性化されて使えるようになることである。これは、十分に内在化されていなかった言語知識がアウトプットとして使われることによって、より深く内在化されることである。

（同：67）

言いたいことがあるのに英語で言うことができない。以前学習した表現であってもいざ使おうとすると出てこない。このような状況は実は英語学習においては重要だということである。また、タイミングを見計らって、学習者が必要とする表現や言語知識を上手に提示してあげることこそ効果的なインプットとなりうるのである。Group Work Reportingは、①アウトプットする内容と場面がある②英語で何とか伝えようとあがくことで第二言語能力が引き伸ばされる機会がある③手の届くところに必要なインプットがある活動である。①②のような状況に学習者を意図的に追い込むことができ、必要に応じて、英語表現に注意して聞いたり読んだりして言語知識を取り込むことができる。次に

Group Work Reportingの活動内容と指導の実際について述べる。

3. Group Work Reporting

私たちの母語を用いた日常生活において、テレビやラジオで見たり聞いたりした番組の内容や新聞や雑誌で読んだ面白い記事の内容、友達や同僚から聞いた話を他の友達や家族に話すという行為は、日常頻繁に行われているコミュニケーションである。本研究で取り組んだGroup Work Reportingは、大まかに言うと「聞いたり、読んだり」した内容を他の人に「話して」伝える活動である。現実の生活場面で起こりうるコミュニケーション活動を教室内に持ち込んだのがこの活動である。本実践で取り扱った「内容」は英字新聞の記事である。

本実践では、Group Work Reportingに、STEP1, STEP2 の二段階の活動を設定した。その違いは、情報発信者の違いである。STEP1 は教師が情報発信者となる。教師が選んだ記事の内容を教師が英語で発信し、学生が聞き、他の学生に英語で伝える。それに対してSTEP2では学生が情報発信者となる。学生が選んだ記事の内容を学生が英語で発信し、レポーターの学生が聞き、グループメンバーに英語で伝える。

ここでは、まずSTEP1を例に挙げGroup Work Reportingの活動の全体像を紹介し、実際の教室における指導、学習過程を説明する。次に、STEP2で、学習者が情報の発信役となるGroup Work Reportingの実践を紹介する。

3.1 Group Work Reporting STEP1

3.1.1 活動の手順

Group Work Reportingは「聞くこと」「話すこと」「書くこと」「読むこと」の4技能を関連させた活動である。教師が話した英字新聞の記事の内容を各グループのレポーター役の学生が聞き、グループのメンバーに英語で話して伝える。レポーターの情報を基に記事内容の要約文をグループで協力して完成させる活動である。レポーターは順番に交代しグループメンバー全員が一度は教師から直接にストーリーを聞くことになる。活動の手順を次に説明する。

- ① 3人組のグループを作る。(図2)
- ② レポーターとなる順番を決める。レポーター1が初めのレポーターとなる。(図2)
- ③ 各グループのレポーターは、教室の外(廊下や別室)で教師の話すストーリーを聞く。(メモは取らない)(図3)
- ④ 話を聞き終えたら、教室の自分のグループに戻り、聞き取った内容を英語でグループメンバーに伝える。(図3)
- ⑤ 残りのメンバーは、レポーターの話聞き、メモを取り、英語でストーリーの要約を各自書く。
- ⑥ 次にレポーター2が同様に教師のところへ行き、同じストーリーを教室外で聞く。そして、グループに戻りストーリーの内容を英語で伝える。
- ⑦ 同様にレポーター3もレポートを行い、計3回のレポートのうちに、グループで協力しながらストーリーの内容を英語で書いて要約文を完成させる。(必要に応じて4回目のレポートを行うことも可能)
- ⑧ 教師は活動中にキーワードを板書したり、各グループの活動を支援したりする。
- ⑨ 最終レポーターのレポート後に要約を整理する時間をとる。
- ⑩ ストーリー元となる英字新聞の記事を配布し、要約を整理する際に活用させる。
- ⑪ ストーリーの要約を完成させる。さらに、記事の内容についてコメントを英語で書いて提出する。
- ⑫ 提出された要約・コメントは次回授業時にフィードバックを行う。

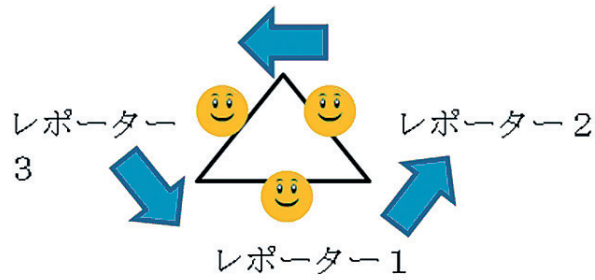


図2 Group Work Reporting グループ作り

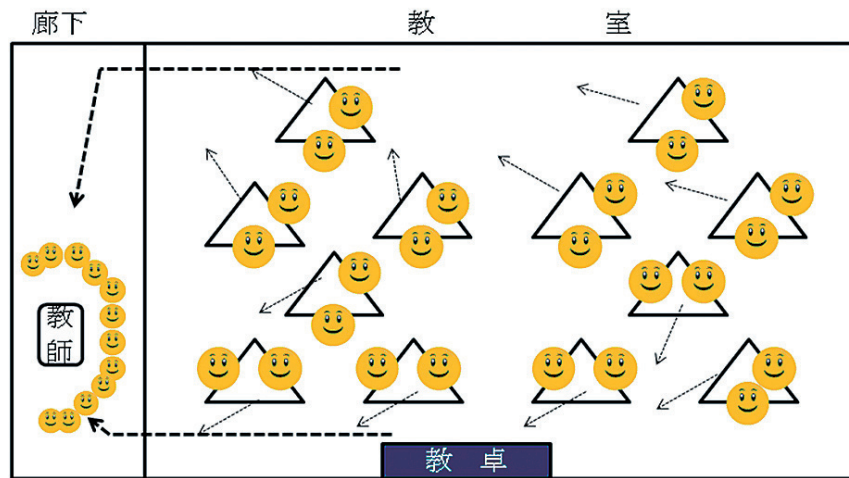


図3 Group Work Reporting活動時の教室利用の様子

3.1.2 内容のリソース

本実践では、英国の大衆紙*Daily Mail*を用いた。その理由は、①教材英語ではなく本物の英語 (Authentic materials) であること②学習者の興味関心を引く内容が多いこと③新聞であるので幅広いトピックがカバーされていること④比較的平易な英文で書かれていること⑤筆者の手元に大量に古新聞があったことなどである。電子版の英字新聞記事であれば、*Daily Mail*に限らず容易に手に入れることができるが、SETP2 で実際に学生が新聞を手にとって読み、記事を吟味できる利点を考慮し、今回は*Daily Mail*を用いた。

3.1.3 ストーリー・テリング

教師が記事の内容をレポーターに伝えるときに、学習者が理解できるような平易な英文で伝えるようにした。また、英語の内容を理解しやすいように関連する写真や情報を視覚的に伝えられるよう、スライドで必要な情報を示した。たとえば、“Toothpaste made me fail the school drugs test” (*Daily Mail* March 3, 2007) では、オリジナルの記事を次のような英文とスライドを用いて伝えた。説明文中の番号は同時に使用したスライドの画面番号である。

Daily Mail, Saturday, March 3, 2007

Toothpaste made me fail the school drugs test

HER teachers couldn't believe it. Neither could Megan Penn.

But the drug test result was unequivocal.

It showed the 13-year-old model pupil had taken crystal meth, the deadly drug that is said to be more addictive than cocaine or heroin.

Although she knew she hadn't taken any drug, Megan and her family had to wait several weeks before further tests showed the culprit - her toothpaste.

Her ordeal began when Megan took part in a random drugs test at her school.

Ministers hope all secondary schools will eventually carry out such tests to identify pupils using cannabis, ecstasy, cocaine or heroin.

The idea is to help those identified address their drug problem, although in some cases police and social services could be called in.

Yesterday critics urged the Department for Education and Skills to scrap plans to extend the

By Ian Drury

programme across the country, claiming the damage caused by incorrect readings such as Megan's was too much to risk.

Megan said she felt 'humiliated' when the mouth swab she gave tested positive for the Class A drug in front of classmates.

She was not the only one. An 11-year-old boy also failed the test, with the results wrongly indicating he had taken amphetamines.

The blunders happened at Colne Community School in Brightlingsea, Essex, where random tests for drugs began two years ago.

"They gave me two swabs to rub on the inside of my mouth," said Megan at her family home in St Osyth. "There was a coloured line on my test which meant it was positive but teachers told me not to worry."

"But later in the day I was asked to go to the administration office and they rang my mum and told her to come to school because it was serious. They said I had failed a test



Brush with disaster: Megan Penn's false drug reading was caused by toothpaste

for a drug called crystal meth. When I left the office there were lots of people watching. It was very embarrassing."

Her mother, Penelope, 48, said: "I couldn't believe it. I was so worried I spoke to our GP who did a test that was completely clear. That helped put our minds at rest but we still had to wait until after Christmas for the school results."

"In January we received a letter from the laboratory explaining that the false reading was probably

caused by some chemical in the toothpaste. I was furious that the school could have jeopardised my daughter's future because it failed to make sure the tests were reliable."

Assistant headmaster Mark Thomson said teachers were immediately suspicious of the results because of the two well-behaved pupils involved.

But he admitted it had been a 'nightmare' for them waiting for further tests to prove their innocence.

Idrury@daily.co.uk

図4 オリジナルの英文記事

Ian Drury "Toothpaste made me fail the school drugs test" *Daily Mail* 3rd March 2007:33

ストーリー・テリングの英文

This is a real story. It is about a school girl called Megan.

(1)Megan is 13 years old and she is a very good student. She is a hard worker and all the teachers love her. She is a model student. One day she took part in a random drugs test at her school. The test result was positive which meant she had taken drugs. Actually Megan had not used any drugs. She had a positive result because of the toothpaste she used. Some chemicals in the toothpaste affected the result.

(2)The department for Education and Skills asked all secondary schools to carry out the drug tests. The purpose of the test is to identify students using drugs in order to help them.

(3)The drug test was carried out by rubbing two sticks on the inside of her mouth. There was a coloured line on the test, which meant it was positive. The test was carried out in front of other students. She felt really humiliated.

(4)Megan was asked to go to the Administration Office and they called her mum and told her to come to school because Megan failed a drug test. The test result said she used a drug called "crystal meth" which was stronger than cocaine or heroin. When they left school lots of friends and teachers were looking at them. She was very embarrassed.

(5)Her mum took her to a local hospital and the doctor did another drug test. The test

result clearly showed she had not taken drugs. She was innocent. Although they knew she was innocent they had to wait several weeks to receive the official letter from school telling her she was innocent. They had a really difficult time.

(6) Now people criticise the Department for Education and Skills and ask them to stop the drug tests because the tests are not reliable.

1



2



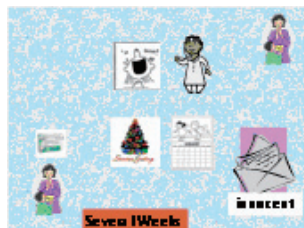
3



4



5



6



図5 内容理解を促すスライド

3.1.4 学習者のメモ

学生は、レポーターの話す英語を聞いて、キーワードをメモしたり、コンセプト・マップと呼ばれるような図を作って理解した内容を整理していた。板書されたキーワードを参考にしたり、日本語や絵を使ったりして、聞き取った内容をまとめる手助けとしているものも見られた (図6)。

3.1.5 要約文の完成

要約文の完成には、単語のメモやコンセプト・マップを元にストーリーを復元している学生が多かった。一人目、二人目のレポートは内容理解をすることを中心に聞き、三人目、四人目のレポートでは、表現の仕方に焦点がシフトしていったようである (focus on meaningからfocus on form)。最終レポーターには、ある特定の表現を聞き取ってくるようにメンバーからリクエストが出されることもあった。また、最終レポーターの後に要約文を書く時間を確保したのは、レポートを聞きながら要約文を完成させるとことは難しく、じっくりと内容を考えながらストーリーを復元することが大切であると考えたからである。要約文作成時間の後半では、ストーリーのもととなる英字新聞の記事を配布し、記事を読みその中の英語表現を参考にしながら要約文を完成させることができるようにした。また、記事の内容についてのコメントを付け加えるように指導した (図7)。

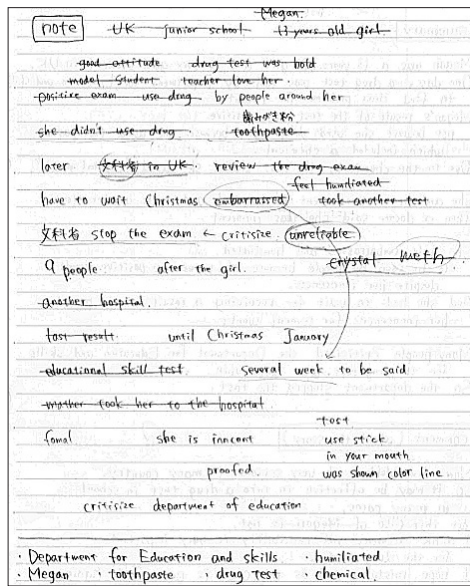


図6 学習者のメモ

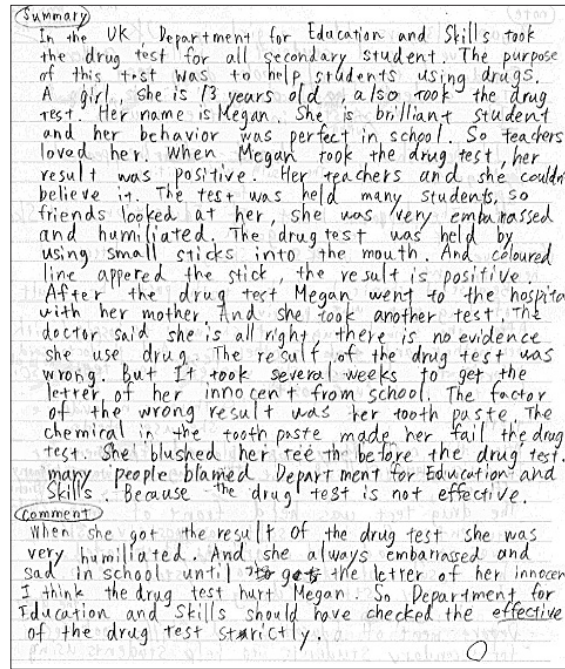


図7 完成した要約文

3.2 Group Work Reporting STEP2

学習者のアウトプットの機会をさらに拡大するために、STEP1で教師が行っていた役割を学習者に行わせた。つまり、学生が選んだ記事の内容を学生が英語で発信するのである。まず、英字新聞を読みその中から読み手聞き手ともに興味のあるような記事を探し出し、次に、内容を簡単な英語で要約し、ストーリー・テリングを行うのである。本来は、教師が行ったように個々の学生が単独でストーリーを発信することを目指したいが、今回は時間の制約もありグループでのプレゼンテーションを基本とした。学生は次のような順で学習を進めていくこととなる。①記事の選定②記事内容の要約③ストーリー・テリングの準備、練習④ストーリー・テリング本番⑤オリジナルの英文記事の配布。それぞれの学習の段階について次に説明する。

3.2.1 記事の選定

教師は大量の古英字新聞を教室に持ち込み学生に自由に閲覧させ興味ある記事を選ばせた。学生は、記事を選ぶためにいくつかの記事を大雑把であっても読まなければならない。読む際には、まず読み手である自分にとって興味関心のある内容であるか、ストーリーの聞き手となるクラスのメンバーにとっても興味関心のある記事であるかを判断しなければならない。また、プレゼンテーションのやりやすさなども考慮に入れているグループも見られた。ここで重要なのは、教材として英字新聞の英文を読むのではなく、プレゼンテーションのために題材を選ぶという目的のために読むことになることである。学習のためのリーディングではなく、ある目的のために読むことになる。そういう意味では、学生を、学習者 (learner) から、英語を使用して何かを行う英語の使用者 (user) へと変身させることができる。村野井 (2006) は、英語学習者が使用者になることは「言語中心第二言語学習」(Language-centered L2 learning) を「内容中心第二言語学習」へと変える重要なポイントだと指摘している。

学生が選んだ記事には、

“Skydiving collie falls 165ft from a clifftop and lives to bark again” (愛犬奇跡の生還—50mダイバー) (Daily Mail April 7, 2007:33)

“DEAD MAN WALKING? How Owen's knee was rebuilt with ligaments from young donor” (マイケル・オーエン黄金の足を支えた靭帯ドナー) (*Daily Mail* April 28, 2007:123)

“Twins with 2 mums” (二人の母を持つ双子の姉妹) (*Daily Mail* June 9 7, 2007:9)

(見出しの日本語訳は筆者)

などがあり、聞き手の興味を誘う記事を上手に見つけ出しレポートしていた。

3.2.2 記事の要約

要約の段階では、単にあらすじを伝えることではなく、難しい表現を易しい表現で言い換えるなど、聞き手の理解可能なプレゼンテーションとなることを考慮しなければならない。特に、将来英語教師として、教材のオーラル・イントロダクションなどを行う際には非常に重要な指導上のポイントとなる。また、大事な情報を落とさずに、聞き手に事実関係を正しく伝えるには、何度も記事を読み返し要約文を作成する必要がある。つまり、十分なアウトプットを行うには、実は、十分なインプットがなければならないのである。Group Work Reportingは、アウトプットを重視した活動ではあるが、STEP2 では、アウトプットを重視することによって結果的にインプットも重視することになるのが本実践のもうひとつのねらいである。

3.2.3 学生によるストーリー・テリング

ストーリー・テリングの準備、練習では、要約を書いて準備したり、プレゼンテーションの練習を何度も行ったりしていた。内容を視覚的に伝えるスライドや小道具、ジェスチャーを用意し、難しい表現をやさしい表現に言い換えをするなどの工夫がみられた。また、本番でも、少なくとも3、4回のプレゼンテーションを行う必要があり、学生は、練習、本番を通して、かなりの回数ストーリーを語ることになり、言語知識の自動化が進むことが期待できる。

4. まとめ

「英語で言いたいけど言えない」「英語を聞いて理解できたけど、同じ内容を英語で伝えることができない」などGroup Work Reportingを行った学生の感想（参考資料）から、学習者の第二言語能力の「穴」、ギャップに気づくような状況に学習者を追い込むことができたことがわかる。また、教師や学生によるストーリー・テリングや英字新聞の記事などが、追い込まれた学習者が必要とする表現、言語知識を供給するインプットとして有効に活用された。専門科目「英語コミュニケーション」の授業において、学生の英語によるコミュニケーション能力を高める試みを提案することが本研究の目的であるが、そのねらいを達成できたのではないかと考える。

Group Work Reportingは、ストーリーの内容と使用する英語のレベルを調節することで、様々なレベルの学習者に対応することが可能な学習・指導法である。したがって、同様の活動を中学校、高校の英語授業において実践することが可能である（石井他，2000）。本実践の対象となった学生は英語科の教師を目指す学生であり、Group Work Reportingの学習体験が学生の「英語教授力」の向上にも貢献できたのではないかと考える。また、本実践では、学習者は聞き取った内容の要約を書くことが最終的なタスクとなっていたが、要約を書くことにとどまらず、要約した文を基にニュース原稿を作り、英語のニュース番組を作るなどのアウトプット活動に発展させることも可能である。

本研究は、実践の報告、提案を主なねらいとした。しかし、今後は、Group Work Reportingによる学習の効果を調べる必要がある。この学習法を継続することによって、書く能力、話す能力がどのように変化したかを調べるのが今後の課題である。指導前後でそれぞれの能力が有意に高まったかどうかを検証する研究を今後継続していきたい。

(参考資料) 学習者の感想 (原文のまま)

- ・とても面白い取り組みだった。英語を聞き理解したことを他の相手に伝えるという作業は言語学習にとっても有効だとおもう。
- ・自分の順番の前では、教えてもらったことを基に単語でキーワードを出し、それをつなげて意味の通る話にしようとしていた。自分の順番が終わった後では、自分の中である程度ストーリーが理解されていたので忘れた部分を思い出したり確認するという感じだった。
- ・取り上げられた記事も面白かったしとても好きです。聞いたことを話すので一から自分の言葉にするのではないので負担は軽くなるけど、自分の言葉でも補わなければ伝わらないので、アウトプットの力がつくのですごく有効な活動だと思います。先生が随時キーワードをボードに書いてくれるのもよかったです。
- ・この活動で、英語を聞くこと、英語を話すこと、また、書くことと、耳、口、手、目で英語を感じ取ることができ、活動の間は頭の中が英語でいっぱいでした。自発的に英語を使おうとすることができ、そういった環境はなかなかないので英語の学習にも役立つと思います。
- ・自分の順番が回ってくるまでは、グループの他の人の言っている英語を聞き取らなければいけなく、頭の中はぼんやりしていて、分らないところが穴あきのような状態になっています。しかし、何回か話を聞いたり、実際に十分の番になって話を聞くと、ああそういう事を言っていたのかとだんだん穴ぼこが埋まっていきます。自分の得た情報を即座に英語にすることは難しいけど、回を重ねるごとに自分なりにやさしい単語に置き換えたり、簡素化して短文で伝えるように自然となっていました。説明をしたり自分の言いたいことを英語で伝える練習にもなり、英語力は上がるだろうなと思いました。
- ・終盤の順番の人になると、分らない表現だけを部分的に聞くという役割に変化していた。
- ・グループの仲間と一緒に1つの答えを出すという形式は安心感が生まれると思う。
- ・まず外に出て内容を聞く時は、流れをつかむこと、キーワードとなる物や数字を覚えようと必死になっています。初めのうち、年号や金額などの数字にこだわっていましたが、何度かsummaryを書いて、詳しい数値はさほど重要ではないかもしれないという考えが出てきました。あと先生の使う表現をそのまま覚えようと頑張っています。なぜなら、単語は覚えていても、自分の言葉で文にしたり説明したりするのが苦手だからです。でも、単語しか出てこない時も多々あります。
- ・summaryを書くときは新聞の記事を参考にするけど、自分の中で分かったことを整理して書いて、知らなかった単語を知ることができた。どんな話なのか考えていって、驚くような話だと興味がわいた。

<参考文献>

- Ellis, R (1994) *The Study of Second Language Acquisition* Oxford: Oxford University Press
- 石井利明, 坂田三千代, 青野亮子, 山戸田孝則, 笠井誠司, 巽徹 (2000) 『言語活動ステップアップ事例集 イエス・ユー・キャン3年』 開隆堂出版
- クラッシュン/テレル 藤森和子訳 (1986) 『ナチュラル・アプローチのすすめ』 大修館書店 (Krashen, S. & Terrell, T (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the classroom*. Oxford: Pergamon/Alemany)
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店
- 文部科学省 (2002) 『「<英語が使える日本人>の育成のための戦略構想」の策定について—英語力・国語力推進プラン』 文部科学省
- (2003) 『「英語が使える日本人」の育成のための英語教員研修ハンドブック』 開隆堂出版

<参考サイト>

- Daily Mail
<http://www.dailymail.co.uk/>